

ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業に係る研究報告書（2年目）

岡山県立東岡山工業高等学校

1 はじめに

本校は創立以来、地域に根ざした工業高校として、ものづくり人材を育成し、社会貢献を果たしてきた。近年、ものづくりにおいてもグローバル化が進み、製造現場に外国人労働者が増えると同時に日本企業の海外進出も進んでいる。

本校では、グローバルな視点を持ち、多様性を尊重し、持続可能な社会づくりに貢献できる生徒の育成を目標に掲げ、「グローバルプロジェクト」を開始して9年目を迎えている。留学生や外国語指導助手（ALT）に対して「ものづくり in English」等の取組を行っているが、生徒たちの英語に対する意識、学力は、非常に多様な状況である。

様々な課題がある中で、生徒の英語に対する意識を改革し、英語力を向上させ、併せて、生徒一人ひとりの自己肯定感、主体性の育成を図っていきたいと考えている。

令和5年度から岡山県教育委員会の「ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業」のモデル校として指定を受け、新入生を対象に英語4技能を学習できるアプリ「English 4skills」（NTTコミュニケーションズ）を活用して学習を進めていった。しかし、NTTコミュニケーションズから「English 4skills」のサービス終了の知らせを受け、本年度からは、本事業において現2年生の学習習慣・基礎学力の確実な定着等を図っていくことを目的に、使用アプリを「DMM英会話」（DMM）に変更し、個別最適な学習を実現するための取組を推進することとなった。

2 事業研究の概要

（1）研究主題

1人1台端末と学習アプリ（令和5年度：「English 4skills」令和6年度～令和7年度：「DMM英会話」）を活用した個別最適な学びの実現

（2）研究体制

学校全体で取り組むため、プロジェクト拡大委員会は22名で構成している。（英語科、学年主任、該当学年各専門科担任、情報管理部、教務課長、教務主任、事務会計担当者、副校長）

（3）研究計画

①令和5年度（1年目）

アプリの導入と生徒の実態に合わせたアプリの活用方法を研究する。

- ・生徒の興味関心やニーズを調査し、研究主題・年間計画を設定する。
- ・プロジェクトチームを立ち上げ、チームを中心として先進校視察を行う。
- ・英語科を中心に、アプリを用いた教科指導の研究を行う。1年生は10月に全員リスニング英検を受験するため、1年目は特にリスニング力の強化を目指して取り組む。ヘッドホン等の必要な機材を整備する。
- ・担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒へのフィードバックを行う。
- ・生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
- ・外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
- ・年4回（4月・7月・12月・3月）県教委・NTTコミュニケーションズ・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
- ・1年目の成果報告会を実施し、2年目の研究に向けて意見交換や改善を行う。

②令和6年度（2年目）

学習習慣の定着を図る。（量をこなし、意識せずにできる状態を目指す）

- ・生徒のアプリ活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関等について、プロジェクトチームで分析を行う。
- ・英語科を中心に、アプリを用いた効果的な教科指導を研究・実践する。
- ・担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒一人ひとりへの個別支援を行う。

- ・生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
- ・外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
- ・年4回（4月・7月・12月・3月）県教委・DMM英会話・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
- ・モデル校間での情報交換を行う。
- ・2年目の成果報告会を実施し、3年目の研究に向けて意見交換や改善を行う。

③令和7年度（3年目）

基礎学力（特に英語力）の向上と知的好奇心の伸長を図る。

- ・生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
- ・生徒のアプリ活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関等について、プロジェクトチームで分析を行う。
- ・英語科を中心に、アプリを用いた効果的な教科指導を研究・実践する。
- ・担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒一人ひとりへの個別支援を行う。
- ・外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
- ・年3回（4月・7月・12月）県教委・DMM英会話・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
- ・モデル校間での情報交換を行う。
- ・3年目の成果報告会を実施し、本研究の結果を他校へ紹介する。

3 前年度（令和5年度）の取組等

（1）令和5年度の取組

①「English 4skills」の運用開始

ア 教員研修

令和5年4月、英語科と1年団の教員全員を対象に、NTTコミュニケーションズによる「English 4skills」の活用に関する研修を行った。

イ 学年団会議

令和5年5月、1年団会議でこの事業の目的を説明し、英語のアプリではあるが、組織図を示し学年全体で取り組むことを確認した。

ウ 学年集会

令和5年6月に「English 4skills」スタートアップ学年集会を実施した。

（2）「English 4skills」の活用

「English 4skills」は英語4技能と文法を学ぶことができる。生徒が個別に取り組む問題は種類もレベルも自由に選択させたが、基礎力診断テストの結果を踏まえ、全体では英検5級レベルの問題から開始した。

① 授業

6月から授業の最初10分程度を使った学習を開始した。生徒全員に解かせる問題を指示し、指示した問題以外は自分の好きな問題を自由に取り組ませた。

取組が定着してきてからは週1回のペースでリスニング演習に取り組ませ、その結果をリスニングのパフォーマンステストとして活用した。

10月以降は、授業においてライティングを中心に週1回10分程度取り組ませた。リスニング演習はパフォーマンステストにも活用した。

② 家庭学習課題

週末課題としてリーディングとライティング問題を配信した。配信した課題を定期考査の出題範囲に含め、取り組ませた。未提出者には教科担任から指導した。

夏季休業課題として、スピーキング50問、リスニング50問、冬季休業課題としてスピーキング23問、リーディング問題30問を配信した。春季休業課題としてスピーキング27問、リーディング9問を配信している。課題未提出者には教科担任だけでなく、クラス担任にも指導に加わってもらった。その結果、提出率はほぼ100%であった。

4 令和5年度の成果

（1）家庭学習時間

学習実態調査における家庭学習時間は4月の32.5分から10月では47.0分に増加した。
(令和5年度1年生)

(2) 英語に関する意識調査

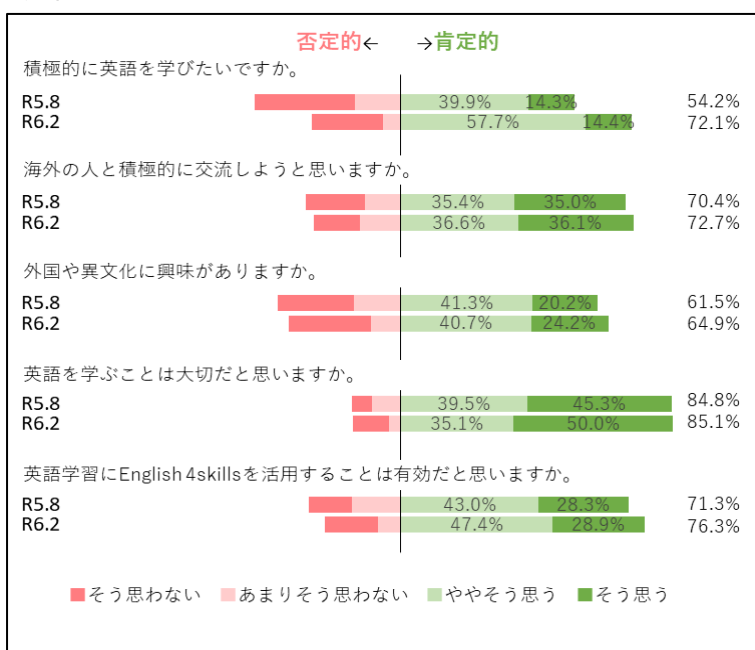
意識の変容を見るために8月と1月にアンケートを実施した。英語に関する意識はいずれの項目も上昇した。特に積極的に英語を学びたい生徒の割合は20%近く上昇した。

(3) 学習到達度

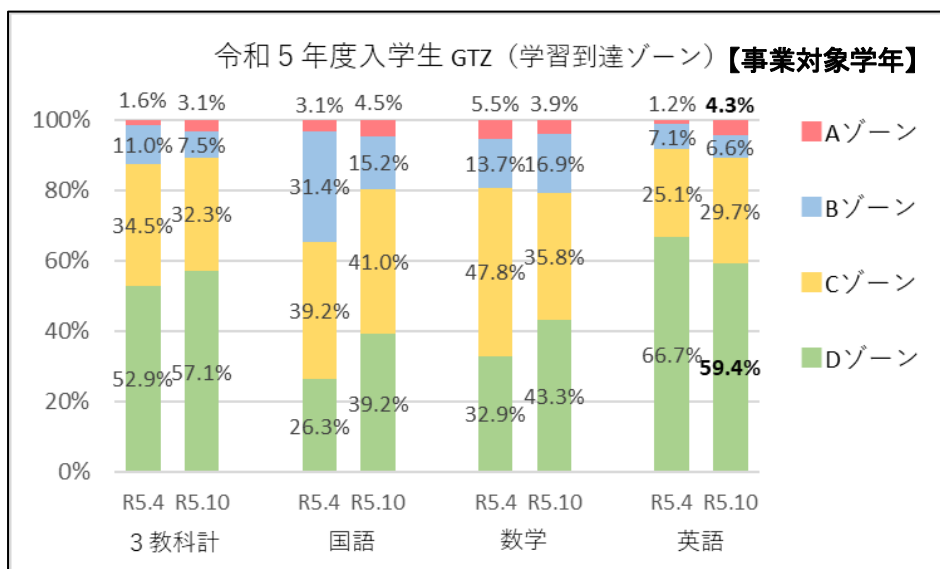
G T Z (学習到達ゾーン) に関しては、例年回を追うごとに増加するDゾーンが、英語においては減少が見られた。英語はAゾーンの割合も増加しており、学力の全体的な引き上げが見られた。

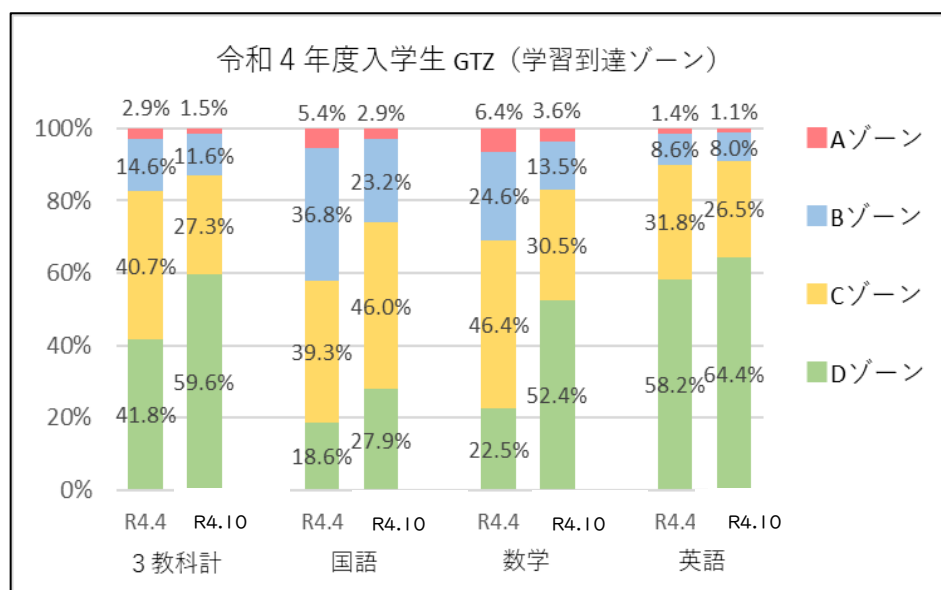
また、国語、数学においても、10月結果では下降しているものの、例年よりは下降度合いは低い。

【英語に関する意識調査の結果：令和5年度入学生（令和5年8月・令和6年2月）】



【ベネッセ基礎学力診断テストの結果比較】





（5）課題

本事業の一番のメリットは、生徒一人ひとりが自分の伸ばしたい分野を自分にあったレベルでいつでも学習し、その結果学力が向上することである。しかし、授業や課題以外に主体的にアプリを活用した学習に取り組む生徒数は少なく、いかに意識づけをしていくかが課題である。

5 今年度（令和6年度）の取組

（1）使用アプリの変更

本年度から、本事業において現2年生の学習習慣・基礎学力の確実な定着等を図っていくことを目的に、使用アプリを外国人講師とのマンツーマンのオンライン英会話や日常会話を中心とした様々な学習ができる「DMM英会話」（DMM）に変更し、個別最適な学習を実現するための取組を推進することとなった。

（2）令和6年度の取組

①プロジェクト委員会

令和6年5月、校内に「DMM英会話」プロジェクト拡大委員会を組織し、「令和6年度実施計画書」「令和6年度目標シート」の内容について確認することで取組の方向性を確認した。

また、DMM英会話から講師を招聘し、アプリを有効に活用して、生徒の英語力向上につなげていく方策についての説明を受け、教職員間で共有を図った。

10月の拡大委員会では、アンケート調査による生徒の意識の変容、データの分析内容等の共有を行い、今後の校内における組織的取組について意志統一を図った。

② 教員による県外先進校視察

令和6年6月から9月の期間に、英語科教員4名が「DMM英会話」を効果的に活用している県外の先進校を視察した。

視察先及び参考になった取組等は次のとおりである。

【先進校視察先と参考になった取組等】

視察先	視察日	参考になった取組等
福井県立武生東高等学校 (福井県)	令和6年6月17日	・ DMM英会話の利用法についてはお互いに情報交換ができた。DMM英会話の利用できる機能や、授業だけでなく家庭でのDMM英会話の活用法など、今後に向けて多くの情報交換を行うことができた。

向上高等学校 (神奈川県)	令和6年8月27日	・DMM英会話での取組や成果を定期 考査等にどのように活用、反映させて いくのか等、指導と評価の一体化も視 野に多くの示唆をいただいた。また、D MM英会話受講後、校内でのスピー キングテスト時の発話量の増加や生徒の 英語使用への抵抗感は確実に薄れてい る様子が大変印象的であった。
神戸松蔭中・高等学校 (兵庫県)	令和6年9月12日	・DMM英会話を探究と関連付けたり、 他教科で学んでいることについて各国 の講師にインタビューしたりすること で、DMM英会話を「目的」ではなく、 「ツール」として活用していた。授業の 中で時間を保証することも生徒にとつ ては大きな安心材料となっている（平 日は毎日英語の時間で取り組ませる）。 土日、長期休暇は各自で自由に毎日取 り組み、やる気のある生徒はどんどん 上達していた。
北川村教育委員会 北川村立北川中学校 (高知県)	令和6年7月17日	・DMM英会話をより有効活用してい く方策やアドバイスをいただくと同時 に、実施体制として、教育委員会と現場 の教員が同じ方向に向かってそれぞれの 持ち場で協働する重要性を再認識で きた。また、普段から風通しの良い関係 性を職場で作ることが大事であることを 確認した。

③ 授業におけるDMM英会話の活用

ア 事前スピーキングテスト

令和6年6月、授業時間を使ってDMM英会話のスピーキングテストを実施した。スピーキングテストは初級から中級レベルまでの問題構成となっているため、本校の生徒には解くことができない問題が大半を占めることが予想された。

そのため、DMM英会話導入時に生徒の英語学習へのモチベーションが損なわれることを避けるため、英語科でスピーキングテストの流れやサンプル質問等を英語と日本語で示したワークシートを作成し、事前指導を入念に行った。

この事前スピーキングテストは、DMM英会話アプリ導入時の生徒の学力がアプリの問題レベルと合致しているかをチェックするという目的もあり、テストに欠席した生徒には、後日実施した。

イ オリエンテーション

DMM英会話の利用開始に際し、令和6年6月から、全クラスの授業においてDMM英会話利用の目的やDMM英会話の機能について丁寧なオリエンテーションを行った。特に、DMM英会話に包含されている英語の語彙力強化を目的とした「iKnow」等の機能の活用方法や振り返りシートの活用方法について説明し、学習意欲の喚起を図った。

ウ 外国人講師との英会話レッスンに向けた準備

外国人講師との英会話レッスンメニューには、基礎的な内容の「発音練習」「会話」から、発展的な「Daily News」「文学」「英検・TOEIC・TOEFL・IELTS スピーキング対策」「フリートーク」などがある。初めのうちは、講師の発音をモデルにリピートを行う「発音練習」を中心にレッスンを受講し、慣れてくると生徒の興味関心に合わせて、自由にレッスンメニューを選んで予約させた。自由にレッスンメニューを選択できるようになっても、基礎的なレッスンばかりを選択する生徒が多かったため、英語科でレッスン内容について協議し、次のように生徒側から外国人講師に発信する仕掛け作

りを行った。

a レッスン開始時に、外国人講師に必ず自己紹介を行う

b 準備していたインタビューやフリートークをしてから、レッスンを開始する
(インタビューやフリートークの内容例)

- ・講師の好きな自国の伝統料理について
- ・好きな音楽、アニメ、マンガ、スポーツなどについて (各自選ぶ)
- ・講師の国の観光スポットについて (修学旅行で訪れた場所や講師に勧めたい日本の観光地についてのスライドを作成し、オンラインレッスン中にスライドを共有しながら講師へプレゼンテーションする)

徐々に、外国人講師主導のレッスンから生徒主導のレッスンへの移行を目指し、生徒側からの発信の機会を増やしていくことで、レッスン時間が楽しく充実したものになったと話す生徒が増加した。

エ 外国人講師との英会話レッスン

生徒は外国人講師との1対1の英会話レッスンを1回25分、年間10回行うことができる。

アプリ利用開始6月当初は「苦手な英語で外国人講師とマンツーマンで25分間の会話する」と聞いただけで、恐怖心をかきたてられ、前向きに取り組もうとしない生徒も多かった。

そのため、英語科で何度も計画を練り、授業の中で、高校生が就職するある企業の労働者の6割が外国人労働者であるといった例を挙げながら英語の必要性を繰り返し話したり、実際のレッスンの様子等を動画で見せて安心させたりする等、レッスン前のオリエンテーションを丁寧に行った。英語を話すことは怖くない、分からなくても大丈夫、講師の先生は優しい、慣れてくる、伝わると楽しくなる、と繰り返し生徒に伝えた。



オ レッスンで使えるフレーズ集の作成

英語科教員が、「レッスンで使えるフレーズ集」を作成し、授業において活用するなど取組の充実を図った。この「レッスンで使えるフレーズ集」は生徒に大変好評で、外国人講師とのマンツーマンのレッスンには、お守りのように握りしめている生徒もいる。

カ 家庭学習 (夏期休業中における取組)

年間10回の外国人講師との英会話レッスンのうち、3回を夏期休業中に取り組む課題として設定した。1学期に授業の中で行っていた「レッスンの予約」と「レッスン」を、すべて一人で行うことを求めたことが原因で、レッスン消化率は非常に低調であった。その後、夏季休業明けに教科担任及びクラス担任から未受講者へリマインドを行ったが、家庭でのレッスン実施率は思うように上昇しなかった。

家庭における外国人講師との英会話レッスン実施が難しい理由として、「予約の方法を教わったが一人で行うのは難しい」「教科担当の先生に質問できない環境の自宅で、予約やレッスンを行うのは不安でハードルが高すぎる」等の意見があった。

そこで、取り組みせ方を修正し、生徒が一人で予約・レッスンを実施できるま で当面 (年度内) は、授業の中でのみレッスンを行うこととした。

キ 授業公開及び研究協議の実施

令和6年11月20日(水)に研究成果の普及を目的として授業公開及び研究協議を実施し、他校から10名の参加があった。

本事業のこれまでの取組について説明し、小西聡子指導教諭によるDMM英会話を活用した外国人講師との英会話レッスンを行う授業を公開し、研究協議を行った。

(3) 本年度(令和6年度)の成果

① 導入アプリ(DMM英会話)の活用時間(1日平均)

外国人講師と英会話レッスンに向け、家庭学習に「iKnow」等を活用させた結果、生徒に対して実施した調査結果からは、導入アプリ(DMM英会話)の平日の平均活用時間は、8月の9分から12月は12分に伸びた。

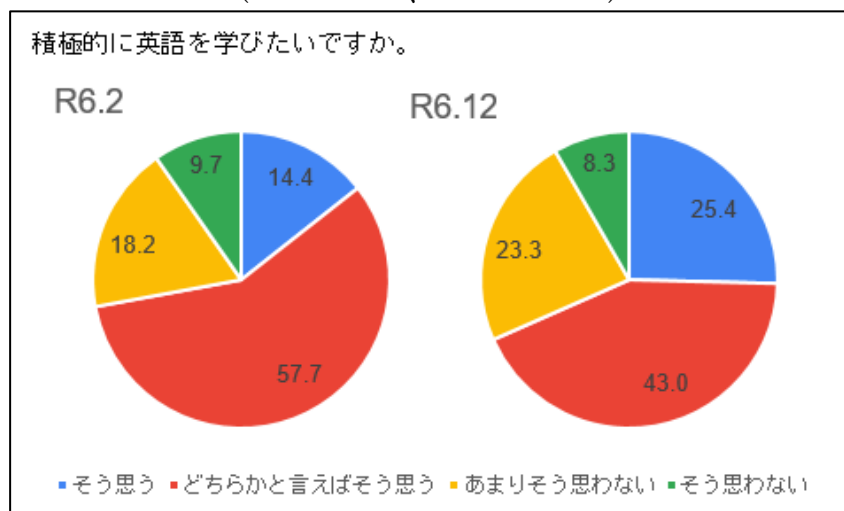
② 英語に関する意識調査

本校が独自に実施した英語に関する意識調査では、DMM英会話による外国人講師との英会話レッスンを繰り返すごとに、「積極的に英語を学びたいですか」という問いに「そう思う」と回答した生徒の割合は、本年2月には14.4%であったが、12月には25.4%に増加した。

また、約70%の生徒が外国人講師と英語で会話することに抵抗感なく取り組んでいると回答しており、多くの生徒が自分の将来を見据え、英語を学習することの意義を感じるようになっている。

【英語に対する意識調査結果の一部】

(R6.2 n=249、R6.12 n=240)



さらに、県教育委員会が実施した本事業に関する生徒の意識調査からは、英語に対するイメージについて「とても大切である」と回答した生徒の割合は、令和5年10月には39.0%であったが、令和7年2月には45.3%に増加した。

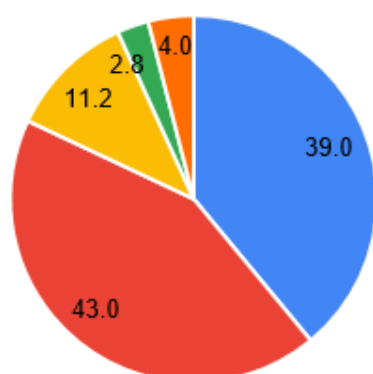
また、使用アプリの活用頻度も「よく活用する」と回答した生徒が3.6%から22.5%に大きく増加する等、生徒の学習に変化が生じている。

アプリをどのようなときに使用していますかとの問いに「学校から指示があった時に加えて、家庭での学習や休み時間等に自主的に使用している」と回答した生徒の割合が4.4%から25.8%に大きく増加しており、一人ひとりが個別最適な学習方法を身に付けながら主体的に学習するようになっていることがうかがえる。

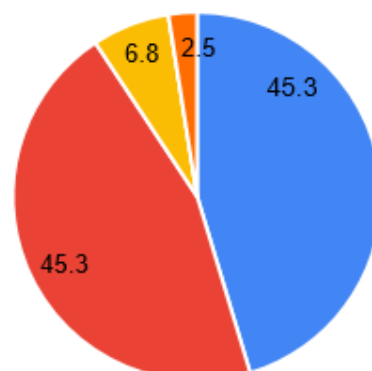
【ICT活用による個別最適な学習推進モデル事業生徒意識調査結果の一部】
(R5.10 n=249、R7.2 n=236)

英語に対するイメージとして、近いものを選んでください。

R5.10



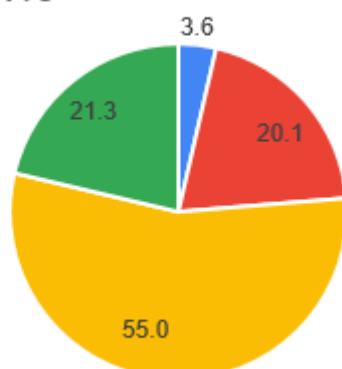
R7.2



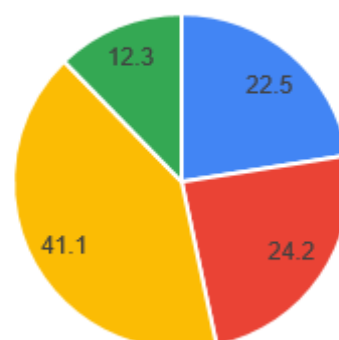
- とても大切である
- どちらかと言えば大切である
- あまり大切ではない
- 全く大切ではない
- 分からない

学習アプリをどれくらい使用していますか。

R5.10



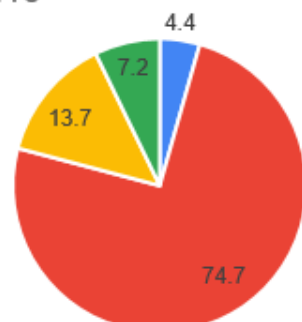
R7.2



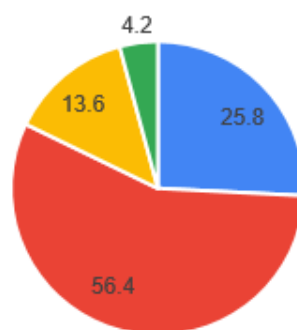
- よく使用する
- ときどき使用する
- あまり使用していない
- 使用していない

アプリをどのようなときに使用していますか。

R5.10



R7.2



- 学校から指示があったときに加え、家庭での学習や休み時間等に自主的に使用している。
- 学校から指示があったときはだいたい使用している。
- 学校から指示があったときにときどき使用している。
- 全く使用していない。

③ 受講に抵抗を感じていた生徒に対する個別指導（面談）

令和6年6月から、受講に抵抗を感じていた生徒（3名）に対し、継続的に個別指導（面談・支援等）を実施した。

外国人講師との英会話レッスンのためのスライド作り、クラス内でのプレゼンテーション活動など、DMM英会話に付随する活動で自信を付けることができ、3名の生徒のうち1名は自宅受講、2名は2学期の終わりまでにはクラスで通常受講が出来るようになった。

このような生徒の成長は、教科担任だけでなく、クラス担任や英語科での連携によって個別指導（面談・支援等）を実現することができた。

④ 「ものづくり in English」

本校では、平成29年度から「東工グローバルプロジェクト」（ものづくり活動を中心としたグローバル人材育成）を実施している。生徒の視野を世界へ広げ、成長につながる実践になるよう様々な取組を実施しており、その一つが「ものづくり in English」である。

「ものづくり in English」は、県内のALT（外国語指導助手）を招き、生徒が学んでいる「ものづくり」について、英語で伝え合うこと等に取り組んでいる。

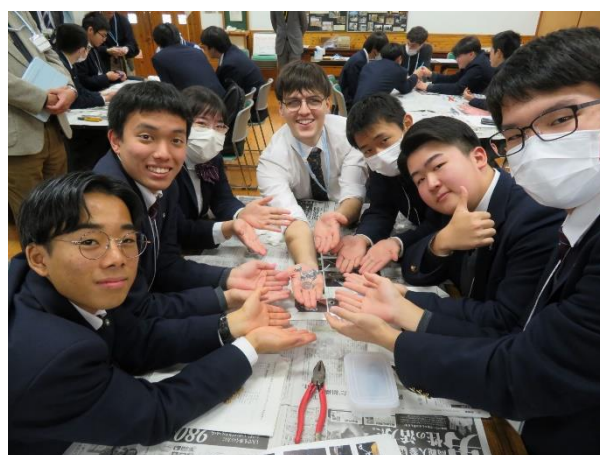
「ものづくり in English」に参加した生徒は、例年であれば1学年20名程度であるが、今年度は、DMM英会話アプリを活用している2年生の参加が最も多く39名であった。（全体68人中39名）

参加した2年生の中には、DMM英会話で外国人との英会話レッスンを繰り返したことで、英会話への抵抗感がなくなり、「ものづくり in English」に参加したいと思うようになった生徒も複数いた。

参加した2年生の感想の中には、以下のように非常に前向きなものがあつた。

【生徒の感想（2年生の一部）】

・英語で外国人と喋っていると楽しい。DMM英会話と同じように、事前に考えてきた質問はかなりうまくいった。しっかり計画を立てて挑んだため、あまり直感的に会話をする事が出来ていなかったのが、今後は、直感的な会話が出来るぐらいに英語を学んだほうがいいと思った。
・DMM英会話以上に、外国人と対面で直接会話したほうが楽しいことがわかった。
・自分が担当しているものづくりの作業について、相手に英語でうまく伝わったみたいで嬉しかった。
・あまり単語などは分かりませんでした、なんとか頑張ってジェスチャーで伝えることができたと思うし、英会話は本当に楽しかった。次回も外国の人と英語で喋りたい。



⑤ オンラインレッスンでの生徒の変容（教師の見取り）

多くの生徒がレッスンを重ねていくうちに、少しずつ外国人講師との会話に慣れ、英語に対する恐怖心が薄らいできたことがうかがえる。レッスン前にはとても緊張した様子だったが、レッスンが始まると徐々に笑顔になり、最後は満面の笑みで「Thank you! See you!」と画面の講師に向かって手を振る。日頃の授業では、見ることの出来ない笑顔であ

る。

2月の最後のレッスンにおいては、全員が「フリートーク」を選択して受講し、25分間講師との会話を続けることが出来たクラスもあった。修学旅行のプレゼンを通して、その内容を材料に話を膨らませたり、講師の好きな観光スポットを尋ねたりなど、最後まで話題を欠くことなく話し続けることが出来た。アプリ導入時と比較すると、笑顔で25分間講師と対話する生徒の姿がとても頼もしく感じた。

⑥ G T Z（英語）が伸びた生徒

本事業における取組により、基礎力診断テストの学習到達度（G T Z）の伸びが顕著な生徒のアプリの活用状況や日常的な取組等について追跡した。

ア 生徒A（男子） 入学時よりG T Zが5段階アップ【 D 2 → C 2 】

G T Z（英語）の変容	入学時（令和5年 4月）	D 2
	2年次（令和6年10月）	C 2
アプリの活用状況	1年次（English4skills）	平日活用時間平均 5分
	2年次（DMM英会話）	平日活用時間平均 10分
生徒に対する聞き取り （生徒の回答）	Ensligh4skills、DMM英会話に積極的に取り組んだからG T Zが上がったのだと思う。1年生の時には英語の基礎力がつき、それにより2年生になってDMM英会話で1年に習ったときの英語力を出すことが出来、実際には話すことで、より英語力がつき、英語がより身近な存在になった。	
その他特記事項	アプリは、学校から指示があった時だけでなく。家庭学習に自主的に活用している。	

イ 生徒B（男子） 入学時よりG T Zが4段階アップ【 D 1 → C 2 】

G T Z（英語）の変容	入学時（令和5年 4月）	D 1
	2年次（令和6年10月）	C 2
アプリの活用状況	1年次（English4skills）	平日活用時間平均 10分
	2年次（DMM英会話）	平日活用時間平均 10分
生徒に対する聞き取り （生徒の回答）	何度も英語の課題を見て、単語を少しでも多く覚えられるようにした。アプリでは自分で読むことができない英語も講師の先生に読んでもらえたので、とてもわかりやすかったし、自分の好きなタイミングですることが出来たので良かった。繰り返し解き直すこともできたのでとても良かった。2年生になってからは、英語のアプリをたまに活用していた。リスニングではメモをできるだけ取らずに話の内容に集中していた。中学校に学んだ単語などがそのアプリを通してもう一度学習できるので、取り組んだ分、自分の頭に知識をたくさん取り入れることが出来た。	
その他特記事項	アプリは学校から指示があった時に使用している。	

ウ 生徒C（男子） 入学時よりG T Zが4段階アップ【 C 1 → B 2 】

G T Z（英語）の変容	入学時（令和5年 4月）	C 1
	2年次（令和6年10月）	B 2
アプリの活用状況	1年次（English4skills）	平均活用時間平均 24分
	2年次（DMM英会話）	平日活用時間平均 39分
生徒に対する聞き取り （生徒の回答）	DMM英会話にある英語を学べるアプリ（iknow）を上手に活用し、課題等に取り組んだ。DMM英会話は実際に外国人と英会話ができるので、単語の意味や文法は学べるし、単語の発音も学べる所が良いと思った。外国人と楽しく会話することでラフな感じで英語が学べるのも良いと思った。文法や単語の勉強、発音練習をしているよりも、実際の話し方や相手の話していることを聞き取ってそれに対する返答の仕方を学ぶ方が実際に自分たちに身に付く力が大きいため、実際の勉強	

	と並行することによって英会話を楽しみながらテストに向けて勉強することが出来た。
その他特記事項	アプリは、学校から指示があった時だけでなく。家庭学習に自主的に活用している。

○ 3 人の取組に共通していること（得られた知見）

3 人に共通していることは、DMM英会話を通して、中学、高校 1 年とで身につけた英語の知識をベースに、前向きに外国人講師と繰り返し対話を行なっていることである。

また、外国人講師との英会話レッスンに向けて「iknow」等のアプリを活用した自分の理解度に応じた学びを定着させている。このように英会話レッスンに向けた準備、そして英会話レッスンの繰り返しが英語力向上に結びついている。

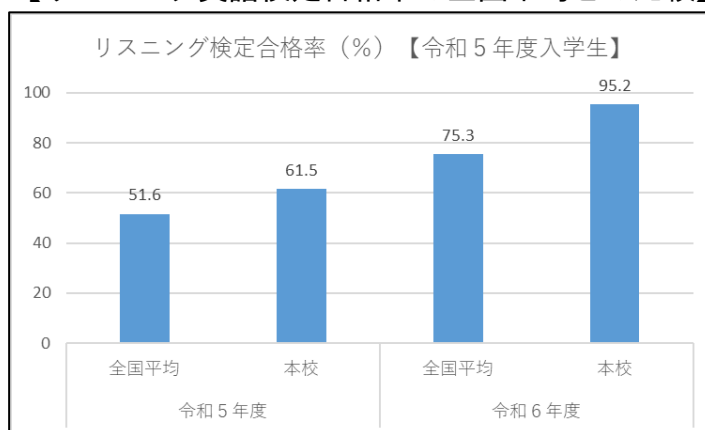
⑦ リスニング英語検定（全国工業高等学校長協会主催）

本検定は、生徒のリスニング力を測ると同時に、工業英語の基礎力育成を目指すために全国工業高等学校長協会が主催して実施しているものである。

昨年度（令和 5 年度）2 年生の合格率は 61.5%であったが、今年度（令和 6 年度）2 年生の合格率は 95.2%であった。

昨年度の合格率の全国平均は 51.6%、今年度の合格率の全国平均は 75.3%であり、本校の合格率は、昨年度、今年度共に全国を上回っていたが、今年度は、昨年度以上の合格率となった。このことから、本事業が現 2 年生において、主体的に英語の学習に取り組む態度の変容や学力向上に結び付いていると考えられる。

【リスニング英語検定合格率の全国平均との比較】



（４）今年度研究計画に対する総括

学習習慣の定着においては、学習実態調査や本事業についての意識調査等から、一人ひとりが個別最適な学習方法を身に付けながら主体的に学習していることがうかがえるが、学年全体でみると日々の学習習慣の定着はまだまだ不十分といえる。

DMM英会話から講師を招聘し、アプリを生徒の英語力向上につなげていく方策について教職員間でベクトル合わせを行なったことと同時に、県教育委員会との調整会議を定期的に実施することを通し、アプリ活用方法の改善等を図りながら、昨年度以上に本事業を組織的な取組に昇華することができた。

生徒のアプリ活用状況、アンケート調査等との相関等について、プロジェクトチームで分析を行い、英語科を中心に、アプリを用いた効果的な教科指導の研究・実践につなげることができた。併せて、担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒一人ひとりへの個別支援、面談等も並行して行い、困り感を抱いている生徒への自信、意欲の涵養につなげることができた。

しかし、学習実態調査や各種テストの分析、指導を細やかに行ない、それらを学習指導に有効につなげていくことが不十分であり、来年度に向けての課題である。

6 月から 9 月の期間に、英語科教員が「DMM英会話」を有効活用している県外の先進校を視察したが、その中で学んだ「DMM英会話」に「探究的な学び」を結びつけるといった、新たな手法を取り入れ、意欲的に、そして、創造的に挑戦することができた。

令和 6 年 11 月 20 日（水）に本校にて成果報告会・授業公開を実施し、県教委をはじめ、

多くの先生方に参加していただき、今後の本事業の取組推進に向けて多くのご示唆等をいただいた。

(5) 課題

これまで2年間、英語の学習においてICTを活用した個別最適な学習に取り組んできたが、学年全体としては、基礎力診断テストでの学習到達度が向上していないことが大きな課題である。併せて、学習実態調査や各種テストの分析、指導を細やかに行い、これまでに以上に、それらを学習指導に有効につなげていく手立ての必要性も切に感じている。

今後は、生徒自身が、個々の学びのスタイルに即して主体的に学習を進めながら、「DMM英会話」アプリの活用時間を増やしていくための課題作成及び提示の工夫が必要である。

また、事業3年目は、教師がこれまで以上に一人ひとりの生徒に合った個別最適な学習を支援することに重点を置いた取組を推進していきたい。

【令和5年度入学生の学習到達度別人数の推移】

【令和5年度入学生】※令和6年度2年生

3教科	令和5年4月			令和5年10月			令和6年4月			令和6年10月		
	到達度	人数	構成比	人数	構成比		人数	構成比		人数	構成比	
	S1	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0%
	S2	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%	
	S3	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%	
	A1	0	0.0%	1.6%	0	0.0%	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	2.0%
	A2	1	0.4%		5	2.0%		0	0.0%	1	0.4%	
	A3	3	1.2%		3	1.2%		3	1.2%	4	1.6%	
	B1	4	1.6%	11.0%	5	2.0%	7.1%	1	0.4%	6	2.4%	7.9%
	B2	7	2.7%		7	2.8%		7	2.8%	8	3.2%	
	B3	17	6.7%		7	2.8%		10	3.9%	6	2.4%	
	C1	22	8.6%	34.5%	17	6.7%	26.8%	15	5.9%	21	8.3%	27.4%
	C2	34	13.3%		31	12.2%		22	8.7%	26	10.3%	
	C3	32	12.5%		34	13.4%		31	12.2%	22	8.7%	
	D1	38	14.9%	52.9%	28	11.0%	65.0%	54	21.3%	57	22.6%	62.7%
	D2	57	22.4%		75	29.5%		70	27.6%	59	23.4%	
	D3	40	15.7%		42	16.5%		41	16.1%	42	16.7%	
		255	100.0%	100.0%	254	100.0%	100.0%	254	100.0%	252	100.0%	100.0%

英語	令和5年4月			令和5年10月			令和6年4月			令和6年10月		
	到達度	人数	構成比	人数	構成比		人数	構成比		人数	構成比	
	S1	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0%
	S2	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%	
	S3	0	0.0%		0	0.0%		0	0.0%	0	0.0%	
	A1	0	0.0%	1.2%	0	0.0%	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0.0%
	A2	2	0.8%		4	1.6%		0	0.0%	0	0.0%	
	A3	1	0.4%		7	2.7%		1	0.4%	0	0.0%	
	B1	2	0.8%	7.1%	2	0.8%	9.1%	1	0.4%	3	1.2%	6.7%
	B2	7	2.7%		4	1.6%		6	2.4%	6	2.4%	
	B3	9	3.5%		11	4.3%		16	6.3%	8	3.2%	
	C1	18	7.1%	25.1%	26	10.2%	26.5%	7	2.8%	14	5.6%	26.6%
	C2	19	7.5%		24	9.4%		28	11.1%	25	9.9%	
	C3	27	10.6%		26	10.2%		32	12.6%	28	11.1%	
	D1	59	23.1%	66.7%	65	25.4%	64.0%	44	17.4%	46	18.3%	66.7%
	D2	82	32.2%		56	21.9%		67	26.5%	75	29.8%	
	D3	29	11.4%		31	12.1%		51	20.2%	47	18.7%	
		255	100.0%	100.0%	256	100.0%	100.0%	253	100.0%	252	100.0%	100.0%

6 令和7年度（3年目）の取組計画

○基礎学力（特に英語力）の向上と知的好奇心の伸長を図る。

- ・G T Z（英語）Dゾーンの割合を 66%→50%台にする。また、生徒の一人ひとりの学習到達度に合った支援を強化することで個別最適な学習を実現させ、A、Bゾーンの生徒に対するフォローアップを図り、学力向上につなげる。
- ・生徒の進路が決定する2学期以降も基礎学力を向上させるための課題を設定する。
- ・英語科を中心に、アプリを用いた効果的な教科指導を研究・実践する。
- ・生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
- ・家庭学習の定着を図る。（生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録・分析することを通して生徒一人ひとりに対する助言を実施）
- ・外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
- ・年4回（4月・7月・12月・3月）県教育委員会・DMM. COM英会話事業部・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
- ・モデル校3校間での情報交換を行う。
- ・3年目の成果報告会を実施（令和7年11月）し、本研究の成果を他校へ普及させる。